3. 解説:都市を巡る トリノ(イタリア)　(Japa 理事・青山学院大学元客員教授 小畑きいち)

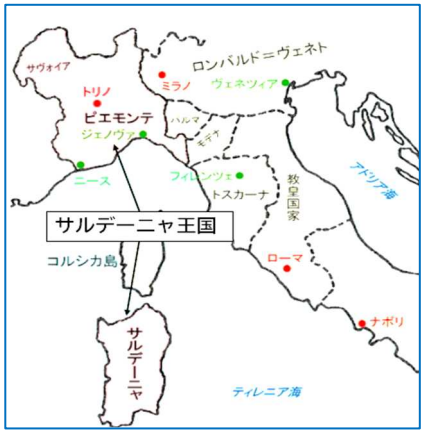
■トリノ(Turin)・イタリア




トリノ市街とシンボルのモーレ・アントネリアーナ

トリノはイタリア第 4 の都市で、ピエモンテ州の州都である。人口は約 85 万人(都市圏は約 170 万人)を数える。サルデーニャ王国の王都(1720～1861 年)を経て、日本の明治維新とほぼ同じ時期にイタリア王国最初の首都(1861～1865 年)となった。アルプスの豊かな水を生かした綿紡績や絹織物などの繊維産業から発展し、19 世紀末から 20 世紀前半にかけて自動車産業が急速に拡大した。現在はステランティス傘下の FIAT(フィアット)発祥の地として、ミラノに次ぐイタリア第 2 の産業都市となった。

【古代ローマからイタリア統一へ】



サルデーニャ王国版図

古代ローマ以前には、ケルト系のタウリニ人(Taurini)が住んでいたと伝えられる。紀元前 1 世紀末、古代ローマの植民市(軍事拠点を兼ねた計画都市)として建設された。13 世紀末にサヴォイア家の支配下に入り、1563 年にはサヴォイア公国の首都となった。サヴォイア家のもとで王宮の建設や街路のアーケード整備が進み、バロック様式の美しい街並みが形づくられ、今日の都市景観へと受け継がれている。サヴォイア家は 1713 年にシチリア島を得て王位に就いたが、1720 年にシチリア島をオーストリアのサルデーニャ島と交換し、以後サルデーニャ王国(ピエモンテ＝サルデーニャ王国とも呼ぶ)を名乗った。

19 世紀半ば、サルデーニャ王国は国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ 2 世と首相カヴールのもとで、イタリア統一運動(リソルジメント)を主導した。1859 年、フランスと同盟を結び、ロンバルディア(ミラノを含む)とヴェネト(ヴェネツィアを含む)を支配するオーストリアと開戦した。ところが途中でフランスのナポレオン 3 世が単独で休戦に応じたため、サルデーニャ王国はロンバルディアのみを得て講和した。カヴールはフランスとの関係を修復し、統一をさらに進めた。1860 年には、パルマ公国、トスカーナ大公国など中部イタリアの国々が、住民投票を経て併合された。一方で、その見返りとしてフランスが割譲を求めたサヴォイアとニースは、住民投票の結果フランス領となった。

統一運動に加わっていた軍人ガリバルディは、1860 年に約千人の義勇兵からなる「赤シャツ隊」を率いてシチリアに遠征し、島を占領した。さらにナポリに無血入城し、両シチリア王国を事実上制圧した。危機感を抱いたカヴールは同年 10 月、南部イタリアとシチリアで住民投票を実施して併合を既成事実とし、ガリバルディも国王との会見で征服地を献上した。こうしてイタリア半島は、ローマ周辺の教皇領(ラツィオ)と、オーストリア支配下のヴェネト地方を除き、サルデーニャ王国の領

土となった。翌 1861 年、国号をイタリア王国と改め、トリノを首都とした。1865 年には首都が中部のフィレンツェへ移された。

1866 年、イタリアは普墺戦争でプロイセン側に立ってオーストリアと戦い、オーストリアの敗北によってヴェネト地方を獲得し、住民投票を経て併合した。1870 年には、ローマ駐留のフランス軍が普仏戦争で撤退した隙に教皇領を占領し、併合した。1871 年に首都をローマへ移し、イタリア王国は名実ともに統一を果たした(なお、1929 年のラテラノ条約により、教皇が主権を持つバチカン市国が成立した)。

【バロック建築とカフェ文化】

トリノの特色は、サヴォイア家の王都として築かれたバロック様式の建築群と、背後にそびえるアルプスの山並みとが調和した景観にある。古代ローマの植民市「アウグスタ・タウリノルム」以来の碁盤目状の街路が今も残り、同時代の城門であるパラティーナ門が威容を見せる。近世には王宮群のほか、カステッロ広場、サン・カルロ広場などの壮麗な広場(ピアッツァ)と優雅な宮殿が整備され、整然とした都市景観を形づくった。これらは「サヴォイア王家の王宮群」として、1997 年に世界遺産に登録された。


トリノ王宮


アダーマ宮殿


カリニャーノ宮殿


モーレ・アントネリアーナ


サン・カルロ広場


トリノ自動車博物館

トリノは歴史あるカフェ文化でも知られる。1763 年創業の「アル・ビチェリン(Caffè Al Bicerin)」は、今も多くの人が訪れる老舗である。チョコレートの街としても名高く、ヘーゼルナッツ入りのチョコレート「ジャンドゥーヤ」はトリノ生まれとされる。1878 年にトリノで創業した「Venchi(ヴェンキ)」などの有名ブランドもあり、根づいたカフェ文化が世界から人々を引きつけている。

【工業の振興・衰退と脱工業化へ】

トリノは、イタリア王国の首都が移転したことを契機に、都市の転換を図った。綿や絹などの繊維産業から自動車産業への展開である。1899 年に FIAT が設立されると、自動車と関連部品の製造業が急速に伸び、トリノはミラノに次ぐイタリア第 2 の工業都市の地位を得た。FIAT は革新的な生産体制を進めてイタリア最大の自動車メーカーに成長し、1923 年に完成したリンゴット工場は


旧 FIAT リンゴット工場

トリノの産業の象徴となった。1950 年代前半に約 70 万人だった人口は、1970 年代前半には約 120 万人にまで急増し、1970 年代には市民の約 60%が自動車関連産業に従事したといわれる。

しかし 1980 年代以降、FIAT の経営不振とともに「自動車離れ」が進み、市の財政は悪化し、人口流出が止まらなくなった。2001 年には人口が約 86 万人となり、ピーク時から約 30%減少した。この危機を打開する策の一つが、2006 年のトリノ冬季オリンピックの開催である。フィギュアスケートで荒川静香選手が日本初の金メダルを獲得した大会としても記憶される。これを機に、トリノは「工業都市」から文化・観光都市へとイメージの転換を進めた。

さらにトリノは、伝統的なものづくりの強みを生かしながら、先端技術やクリエイティブ分野による都市再生を目指した。宇宙・航空分野では、国際宇宙ステーション(ISS)のモジュール製造などを担い、ヨーロッパ屈指の宇宙産業の集積地となった。日本、英国、イタリアの 3 か国が第 6 世代の戦闘機を共同開発する国際計画(GCAP)でも、2026 年 10 月、イタリアで最初の設計・開発拠点がトリノに開設された。自動車デザインの伝統に加え、デジタル・グラフィックデザインの拠点としても発展し、2014 年にユネスコの「デザイン都市」に認定された。食の分野では、ピエモンテ州で生まれた「スローフード運動」(地域の伝統的な食や生産者を守る運動)の国際見本市を開催し、食文化ビジネスを牽引している。

また「トリノ・シティ・ラボ(Torino City Lab)」を設け、新しい技術やサービスを市内で試す場とした。使われなくなった公共施設を「地区の家(Casa del Quartiere)」として再生し、市民コミュニティの活性化を図るとともに、シェアオフィスなどを通じてスタートアップや小企業の育成にも取り組んでいる。こうした取り組みが評価され、トリノは「欧州イノベーション首都(European Capital of Innovation)」(2024～2025 年)と「欧州スマート観光首都(European Capital of Smart Tourism)」(2025 年)に選ばれた。トリノはいま、都市の再活性化に向けて着実に歩みを進めている。

＊リンゴット工場の今
1982 年に閉鎖された FIAT の主力工場リンゴットの跡地は、建築家レンゾ・ピアノの設計による再開発を経て、商業・文化の複合施設として生まれ変わった。名物だった屋上のテストコースは残されて屋上庭園として開放され、ホテル、国際会議場、「アニェッリ美術館(ピナコテカ・アニェッリ)」なども併設されて、トリノ有数の観光・商業スポットとなっている。

【参考・引用】
(1) Anthony L. Cardoza “A History of Turin” - English Version 2005
(2) 大石 尚子「トリノの奇跡」脱工業化都市研究会 2017
(3) Torino city lab “La politica di innovazione della citta di Trino”2026

補：「解説」のバックナンバーは https://www.japa.fellowlink.jp/column に掲載